

# 北千島の停戦交渉

元九一師団参謀部 作戦情報係

長島 厚

平成二年十二月、突然、北千島慰霊の会の  
上ノ山清二氏から、北千島作戦時におけるソ  
連軍との交渉について何か書けとのお便りを  
載いたので、塚越善三郎士魂会長にも相談し  
、かつその斧鉞をいただいて亡き戦友への供  
養及び慰霊の会への報告と思ひ駄文を認めま  
した。

まえかき

当時（昭和二〇年八月）私は、日本の最北  
端、北千島の占守島から捨子古丹島まで大小  
十三の島々を守る第九一師団（師団長堤不  
來貴中将二四期）の参謀部（作戦情報係）に  
勤務し、とくに兵要地誌担当として参謀長か  
ら北千島全島の戦車・陸適地調査を命ぜられ  
、実地を踏査した。この事が後日軍使として全  
島の武装解除に立会することになる。なお私  
は昭和一九年十月に占守島の戦車第十一聯隊  
から参謀部へ転勤になっていたのである。

さて昭和二〇年五月頃には、大本営は北東  
方面防衛の重点を南千島及び北海道本島に移  
行して、北・中千島にある陸海空部隊の大半  
を南進させたので、同方面の制空・制海権を  
敵手に委ねざるを得なくなっていた。

そのため、第九一師団（北千島方面部隊）  
としては、六月以降それまでの海岸陣地を縮  
小し後退配備による遊撃作戦に移行しつつあ  
り、時折り来襲する敵の艦砲射撃や空襲に対

処しつつ、配備変更に応じた新しい築城作業  
や戦闘訓練に邁進していた。

なお北千島の兵力は、十九年十月陸軍四万三  
千、海軍五千とわれたが、二十年六月には、  
陸軍二万三千、海軍千五百に縮小していた。

## 北千島の自衛戦闘

八月十五日、終戦の大詔を拝し、翌十六日、  
戦闘行動停止の命を承けた堤師団長は、十七  
日司令部において部隊長会同を開き、「各  
部隊は一切の戦闘行動を停止せよ。ただし止  
むを得ない自衛行動はこれを妨げず、徹底の  
時期は八月十八日一六〇〇とする。」と指示  
し、戦闘終結の処理を命じた。

しかるにその夜八月十八日〇二〇〇頃、カ  
ムチャツカ半島南端のロバト力岬からの長射  
程砲の援護下に、突如ソ連軍が占守島北部の  
竹田浜に上陸を開始し、わが守備部隊との  
間に戦闘を開始した。

このソ連軍上陸の報告を受けた師団長は、  
〇二一〇取り敢えずに全部隊に戦闘準備を下  
命するとともに、〇二三〇戦車第十一聯隊長  
池田末男大佐三四期に、国端方面に急進して  
敵を撃滅するよう命じ、また、第七十三旅団  
長杉野巖少将二五期に対しても、兵力を集結  
して該敵撃滅を命ずるとともに、さらに幌筵  
島からも所要兵力を占守島に急進させ、要す

れば師団司令部も占守島に進出することとした。

さて既に大詔のもと終戦処理を開始していたにもかかわらずソ連軍の奇襲攻撃を受けた師団は、自衛のため敢然として決起し、水陸陣地守備部隊や戦車部隊は果敢な迎撃戦闘を展開した。そのため莫大な損害を出したソ連軍は、態勢を建て直し再び強襲作戦に移行しようとしているようであつたが、十八日午後に入り、わが迎撃態勢が逐次組織化されてきたので、ソ連軍の進攻企図は挫折し、国端崎から小泊崎一帯に後退して橋頭堡を築いている模様であり、わが方も一時反撃を中止し、四嶺山から沼尻北方に至る線に展開して対峙することとなつた。

### 停戦交渉

#### (1) 軍使拝命

その頃師団長は、彼我將兵の無益な死傷を回避すべく停戦交渉の軍使派遣を決意され、参謀部付の私に軍使を命ぜられた。これより先、私は旅団長の作戦指導を補佐するため旅団司令部に進出していた。一三〇〇頃師団長から「第一線部隊の戦線整理と停戦交渉」を命ぜられたので、私に随行することになった司令部勤務の木下少尉、成瀬曹長、鈴木上等兵(伝令)及び日魯漁業の牛谷通訳や、般林小隊長の指揮する護衛二ヶ分隊(第一分隊長板垣軍曹、第二分隊長石川伍長)約二十名の集結完了をまつて一四〇〇頃、旅団司令部を出発した。

ところが困ったことに、司令部付近に集結していた部隊の一部が我々の行く手を遮り、「戦友が大勢戦死したのに反撃もせず停戦交渉に行くとは何事だ!」と私に詰め寄り前進を妨害しようとしたが、何とか説得して前進することができた。我々は日ソ両軍の弾丸が飛び交う中を、気は焦りつつも、ある時は匍匐前進し、あるいは走り、あるいは前進中の戦車に跨乗させて貰って、四嶺山に展開している第一線に向かって急行した。一五〇〇頃、辛うじて戦車部隊の輪形陣にたどりつき、聯隊の状況を聴取するとともに、聯隊の指揮をとっている伊藤力雄大尉(陸士同期)の所在を確かめようとした。一方、戦車陣地内でわれわれ軍使一行の状態を確認したところ、

先程来の集中砲火を浴びて、護衛小隊長はじめ隊員や牛谷通訳ら約十名が消息不明となっていた。また軍使の印である白旗も被弾や硝煙により汚れ破れ、無用の長物となり捨ててきたとの報告を受けた。私は木下少尉ら七名の生存者を行方不明隊員捜索のため残し、成瀬曹長を伴い戦車の砲塔に跨乗して伊藤大尉の所に赴こうとしたが、砲火を浴びて成功せず、また徒歩で行く事とした。迫撃砲弾独特の弾道音や、けたたましい銃砲声を聞きながら、先刻戦車隊の戦友から聴いたその勇戦奮闘の状況を噛みしめつつ前進を続け、一六三〇頃、霧の切れ目から漸く伊藤大尉らしい人影を認めて近寄ると、元気に部隊の残存兵力を指揮している伊藤大尉であつた。

私は彼に師団長の意図(戦線整理と停戦交渉)を伝達し、被害局限の措置をとるよう依頼し、握手して別れた。さらに近くで戦車隊配属の工兵二コ中隊を指揮していた泉広利少佐(五十三期)に会い、同様のことを伝達するとともに、伊藤隊長の位置を説明し、彼と協力して被害局限の措置をとるよう依頼、再会を約して別れた。そして私は木下少尉らを收容しつつ、一路ソ連上陸指揮官を求めて北進した。(伊藤大尉は復員後昭和三十五年に死去した。)

その後、対敵警戒しつつ北進すること約一時間、既に日没となりこのままではわが任務の達成はおろか被害が一層増加すると思い、小休止して後図を策することを決意し、進路近傍の窪地を見つけて全員集合を命じたところ、木下少尉以下八名に減っていた。私は「このまま前進しても損害のみ増加して任務達成は至難である。以後は私独りが任務を続行してその責任をとりたい。木下少尉は全員を指揮して大観台に帰り、『現状を報告し、明朝以降、さらに軍使派遣の要ある旨を師団長ご具申せよ。』なお、任務不達成の責任をとって死ぬことは簡単だが、虎穴に入らずんば固虎子を得ずの譬えの通り、私は単独で現任務を続行する、」と自分の意図を述べ、木下少尉らを司令部へ後退させることとした。ところがその時成瀬曹長(北海道紋別郡出身復員後死去)は、「大尉と同一行動をとり、一緒に死にたい」と申し述べ、板垣護衛第一

分隊長（岐阜県出身）は「私は部隊長から軍使の護衛を命ぜられていたので大尉殿と共に死にたい」と申し出たので、二名の心情を察し同行を許可した。

そして、私たち三名は、後退する木下少尉ら六名を見送った後、さらに北進を続けた。一九〇〇頃と思うが、私は、占守街道上を北行すれば、必ずソ連の小哨に遭遇するであろうと判断し、公然と街道上を、長島、成瀬、板垣の順に相当の距離を置いて北進した。途中わが歩兵部隊が捕虜としていたソ連兵を発見したので、案内係としてもらい受け、四名で進んだ。

三十分くらい経ったころ頃、前方の暗闇の中から人声がある。十米くらいまで接近し透かして観ると、前方の小高い丘の木々の間に数名のソ連兵が屯ろしている。予想通りソ連軍の小哨と判断し、同行しているソ連兵に、「ソ連将校に会いたい」と大声で怒鳴らせた。途端に一斉射撃を受けた。我々は側溝に伏し、ハンカチを振り、応戦の意思のないことを伝えようとしたところ、数名の兵が飛び出し、マンドリン銃を腰に構えて数発射ち、さらに肉薄して来て「再度「腰だめ」で二、三十発斉射してきた。もう駄目かと思ったが、不思議に弾丸は、体を掠める程度で命中しなかった。しばらくしてソ連兵は我々が無抵抗であることを理解したか、一斉に飛び掛かってきて、私の軍装品一式はもちろん、時計や軍袴のベルトまでとりあげ、後ろ手に縛り上げて連行しようとした。その動作は、成瀬、板垣の両君と同行したソ連兵捕虜の安全を確認することもできないほどの素早さであった。私は彼ら三名の無事を祈りつつ、ソ連兵のなすがままに委せることとした。平素の訓練で熟知の道路や崖を通過して進むこと約三十分、本部の當庭らしい処に坐らされた。私は覚悟をきめ、今後の行動についてあれこれ思案していた。しばらくして話声がするので見ると、ソ連兵が成瀬、板垣の、両君を連れてきていた。我々はお互いに無傷での再会を喜び会った。この時の光景は、四十五年経った現在でも、鮮烈な印象として脳裏から離れない。

## （2） 敵将と会見

上陸部隊本部の庭に坐らせられたわれわれ

三名は、時折り聞こえる散発的な銃声を聞きながら、次に何が起こるか全神経をソ連兵の動向に集中して耳をそばだてていた。空を見上げると上弦の月が皓々と輝いており、またロバトカ岬の「点かずの灯台」に光が灯り、何事もなかったかのように光芒を放っているのが見えた。昨朝来濃霧に悩まされたことが夢のようであり、八月後半の冷気が身に浸みやつと人心地がついてきた。

それからどのくらい経ったか、時計を奪われたのでよく判らないが、〇二〇〇と思われる頃、まず私が指示されて隊舎内に入ると、少佐、大尉、少尉の通訳ら将校六名が車座になって私を囲み、酒、煙草、鮭缶等（全部日本軍からの戦利品）を出しながら、型通りの尋問を始めた。

私がソ連軍前線に進入した目的として「停戦のための軍使である」と述べたところ、一瞬室内がざわめき、中の政治部将校らしい大尉が突然早口で一同に何事かを指示し、私に対し直接「軍使を証明するものの有無」を質して来た。そこで私が前線で、捕まったとき、全部掠奪された旨答えたところ、彼は傍らに居た少尉に何事かを指示し、しばらくして私の図のうを持参した。中身は殆ど粉失していたが、通信文綴りだけが出てきた。それをめくると、不思議なことに師団長からの停戦文書が挟まっていた。早速これを提示して内容を説明したが、文書の末尾にある「日本軍最高司令官<sup>㊦</sup>」についてソ連側は、「この文書には司令官の氏名とそのサインが無いので信用できない」と言って、どうしても納得しない。私はここで頓挫しては今までの苦勞が水泡に帰することになる。窮余の一策として、中学校時代に習った英語のリーダー「小泉八雲」の《武士道》という文章の中に「HARKIRI」という単語があったことを思いだし、もしソ連将校に教養があれば、「ハラキリ」の意味を知っているだろうと考え、「信用されない時はハラキリする」と怒鳴ったところ、「ウーン」と唸って納得してくれた。そしてこれまでの非礼を詫び軍刀を返してくれたが、他の軍装品は所在不明というのであった。彼らはその後そこそこ連絡しているようであったが、しばらくして少

佐が来て「今から上陸指揮官アルチューフィン大佐の処へ行く」と述べ、指揮所までの案内役として大尉を紹介した。

占守島の夜明けは早く、すでに五時は過ぎていたようだ。しばらく雑談した後、大尉の案内で窪地や塹壕を通り、途中丁重に並べてある日ソ両軍戦死者の亡き骸に合掌しつつ歩くこと、約二十分、小高い丘の下に來た処、厳しく誰何された。案内役の大尉が応答しその説明でここが前線本部と分かった。緊張していると言つた。堂々たる六尺豊かの偉丈夫が現れた。見れば肩章は大佐であり、散発的な至近弾にも驚かない。

咄嗟にそ撃聯隊長だと悟り挙手の礼をした。案内係将校の紹介で、そ撃聯隊長アルチューフィン大佐と確任したので、私は來訪の趣旨を述べ、堤師団長からの停戦文書を手交した。時に〇六三〇ころであつた。

思えば長い道程であつた。それから二、三雑談した後、大佐が「君は何歳か」と聞くので「二十四歳です」と答えると「自分にも同年の息子が居るが、まだ、少尉だ」と言つて破顔一笑した。魅力的な指揮官であつたがその後の交渉では、再び会うことはなかつた。

聯隊長と別れた後、また、先刻の隊舎に戻り、一服した後、成瀬曹長、板垣軍曹と共に、ソ連軍派遣の大尉、中尉、及び海兵隊員等六名から成る軍使一行を案内しつゝ〇八三〇頃大観台の旅団司令部に帰着した。途中、我が軍の擱座戦車に合掌し、あるいは心ならずも捕虜となつた我が戦友たちの列と遇いその無念さを思い、これからの恙がなきを祈つた。そしてその後尾に昨夜私の指示に従ひ同行してくれたソ連兵がとぼと歩いているのを見た。彼は後日処罰されるのではないかと思ひ哀れを覚えた。

司令部では、早速任務達成を師団長に電話報告すると共に同行のソ連軍使を旅団長に紹介した。ソ連軍使は、「一五〇〇高級（ハイレベル）軍使と竹田浜で会いたい」旨停戦交渉の意志を表明した。この旨の報告を受けた師団長は、直ちに杉野少将に軍使を命じた。

私はこれで私の任務も一応終了したと思ひ、昨夜別れた木下少尉や鈴木上等兵（伝令）

と再会し、また、成瀬、板垣の両君とは共に死線を潜り抜けた戦友同士お互いに労を犒い合い、原任務に復帰することになった。

成瀬曹長は、旭川商校出身でスキーの名人であり、特に北千島全島の兵要地誌調査時には私に同行してくれ、さらに雪中踏査時には、九州出身でスキーは無能力者に等しい私を補助してくれた。しかし復員後、伊藤君同様、急逝されたのは残念であつた。

### （3）停戦交渉

しばらくして軍使を命ぜられた杉野旅団長は、柳岡武（三十四期）参謀長や私と、加瀬谷中佐等数名の指揮官を軍使随行者に命ずると共に、種々打ち合わせを行い、一四〇〇過ぎ旅団司令部を出発した。

一行は白旗を掲げて、激戦の跡生々しい占守街道を北進し、定刻五分くらい前に竹田浜に着いた。

途中私は、擱座戦車を拜んでは、戦車隊の戦友の最後を偲びその冥福を祈つた。

定刻、海岸を背にして、上陸作戦司令官グニチェコ陸軍少将がジャーコフ師団長や海軍中佐フォロノフ参謀長等帯同して現れ、所要の挨拶後、直ちに交渉に入った。小柄で精悍な司令官は、日本側の「現在の線でもまず停戦する」の主張に対し「停戦即武装解除」を執拗に迫つて來た。柳岡参謀長は、これ以上の流血を避けるため、ソ連側の要求を入れるよう杉野少将に進言した。杉野少将は受託の旨、グニチェコ司令官に述べ、一応会談が終了した。その後、中背で肩幅の広いジャーコフ師団長や長身で恰幅のいいウオロノフ海軍参謀長等と話し合つていたグニチェコ司令官が我々に擱座戦車を指さし、「戦車を後退させろ」と言い出したので、私が「あれは全部擱座戦車である」と説明してもなかなか納得してくれなかつた。また、小泊崎のわが側防砲兵等のことについても質問してきたが、これらのことはわが歩戦砲工等の諸部隊の反撃がいかに激しかったかの証であり、「死せる孔明、生ける仲達を走らす」とは正にこの事だと思つた。

かくして私にとっては第二回目の交渉を終わり、旅団長以下の軍師の一行は、十九日二〇〇〇頃、大観台に帰還した。

さて、前述の交渉状況の報告を受けた師団長は、「停戦は承知するが武装解除は容認できない」とし、参謀長をして再度この旨をソ軍に伝達交渉するよう命じた。そこで翌二十日午前、参謀長は、私を伴ってソ軍指揮所に赴き、ソ軍最高指揮官との交渉を申し入れたが、グニチェコ少将とは会えず、対応した将校は我が文書を受け取り、「再度交渉の必要なし。日本側通訳は帰隊してその旨を報告せよ。参謀長と長島大尉は残れ」と言い、我々二名をソ軍陣地の天幕内に案内し、「先刻、ソ連軍艦が片岡湾内で射撃された。」と述べ外室を禁じられ軟禁状態となった。私は十八日早朝以来の疲労が出て睡魔に襲われたので、参謀長に断って横になったが、後は前後不覚、相当経って参謀長に起こされ、二十一日朝になつてゐるのを知つた。参謀長が「俺は一睡もできなかったのに、お前は剛胆だ」と言われたが「私はソ軍陣地内だから攻撃されることもないだろうと思つただけです」と答え、二人で笑つた。

しばらくして私達二名は、同行するソ連軍将兵数名と共にソ連軍のジープに乗つて大観台の旅団司令部に帰り、千歳台に進出していた師団長に報告をしたが、その時はじめて方面軍から、停戦、武器引き渡し容認に関する命令が来ていることを伝えられた。

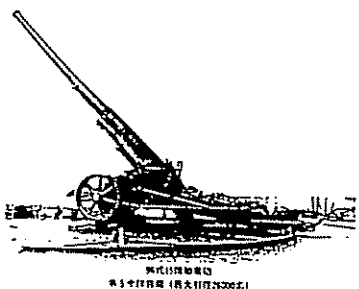
次いで師団長の指示により、同行したソ連将校との間で、停戦及び武器引き渡しに関する交渉を行い、師団長の意図する方向で交渉を妥結した。

師団長は、一切の戦闘行動の停止を命令するとともに、夕刻戦闘司令部を撤収し柏原へ帰還した。参謀長と私も、旅団長に別れの挨拶をして大観台を出発し、師団司令部へ帰還した。

その後、ソ連軍側からの連絡により、翌二十一日一二〇頃、堤師団長は、水津満（五十期）少佐参謀、長島大尉、高橋副官及び通訳の四名（柳岡参謀長は、去る一九日の竹田浜における停戦交渉の時、食言したとの理由によりソ連軍側より出席を忌避された）を帯同し、片岡湾に碇泊中のソ連警備艦キーロフに赴き士官食堂において、既知のグニチェコ司令官、ジャコフを撃師団長、ウォロノフ海

軍参謀長等と会見、降伏文書に調印をし、占守島戦闘は終息をみたのであった。やがて、日ソ首脳による会食が始まり立派なロシヤ料理に舌鼓を打ちながら日露戦争末期の「水師営の会見」とは勝敗の立場は異なるが、このようなものではなかつたらうかと思ひ感無量であつた。

さらにグニチェコ司令官が堤師団長との談半ばに、禿頭でエネルギーな顔をほころばせつつ、私の方を向いて「千島のゲロイ（英雄）」と言つてくれた。私は気障な言葉を使う人だと思つたが、後でソ連軍の表彰用語だと聞かされ、それならそれは私独りのものでなく成瀬曹長、板垣軍曹兩名活躍も含めての言葉だと思ひ感慨に耽つた。



### 停戦の徹底

ソ連軍艦で島を巡る

その後、約一時間くらい経つてソ連側から「これからソ連軍艦が北千島全島（春牟古丹・温禰古丹・捨子古丹）の武装解除に行く。長島大尉はそれに乗艦して水先案内及び武装解除に立会せよ。また、松輪島以南に赴く軍艦には水津参謀が乗れ。なお、ウォロノフ参謀長が乗艦する」と指示があり、私は「陸軍だから水先案内はできない」と述べたが、「操艦は関係ない。泊地への案内と守備隊からの発砲防止に努めればよい」とのことであり、私にとって四回目の交渉に赴くため、師団長と別行動をとることになった。わたくしはソ連海軍の掃海艇級の軍艦（艦長は大尉、乗組員約二〇名）に乗り込み、水先案内を兼ねた軍使となつて、各島を巡ることになった。それにしても、「信を敵の腹中に置く」態の敵将に感服すると共に、乗艦して三泊四日の間、艦長室で起居を共にした若い艦長の機敏

な指揮振りにも敬服した。一方各島では顔見知りの守備隊長の出迎えを受け、それぞれ艦長に紹介して無事停戦行事を終了し、また、各島の泊地でも何とか水先案内業務を終え、松輪島近くまで遊戈南下した後、反転、柏原港へ帰投したのであった。途中、突然「空襲警報 発令」総員配置に就いたので艦橋に行くくと、「米機だ」という。不審に思い、米機は友軍ではないか、と質すと、今後は日本と握手して米軍を叩くのだと言ったり、あるいは、米軍が択捉島付近まで進出しているかもしれないと語ったりした。私はこれらのことから、我が北東方面海域における米ソ両軍勢力圏の角逐がすでに始まっている証左だと思っただ。しかし私としては、これらのことが後日、四島返還だ、二島返還だと、日米ソを巻き込んだの領土問題にまで発展するとは予想だにできなかった。また、私はその時、ソ連軍内の上意下達の迅速性に思いを致し、ソ連とは端倪すべからざる国だとしみじみ思った。さらに艦内のラジオを聞いていると、論功行賞らしいものが放送され、そのうち、グニチェコ司令官が中将に進級の報が入ると、一同拍手して歓声をあげていた。この時ばかりは、敗戦の我が身を思い諸行無常を痛感させられた。

かくして最後と思われる軍使の任務を終了し、三泊四日の航海もつがなく終わり、二十五日昼頃、柏原の司令部に帰って、師団長に所要の報告を済ませて、ようやく寛ぎを覚え、伸び伸びと入浴し、約一週間振りに汚れを落として後図を策することとなった。

### 軍使から捕虜生活へ

饒ってこれまでの事を顧みると、陸士入校以来、学校・部隊等で習得演練する機会の無かったものばかり、特に「軍使」受命については予想だにできなかった重い任務であったが、辛うじて任務を遂行し得たことは、師団長はじめ戦友各位のご配慮に負うところ大であり、一方ソ連軍関係者にもその人を得たからこそと感謝している。同時に私は天佑神助か先祖の加護か、私が目に見えない幸運に恵まれたことを否定できなかった。

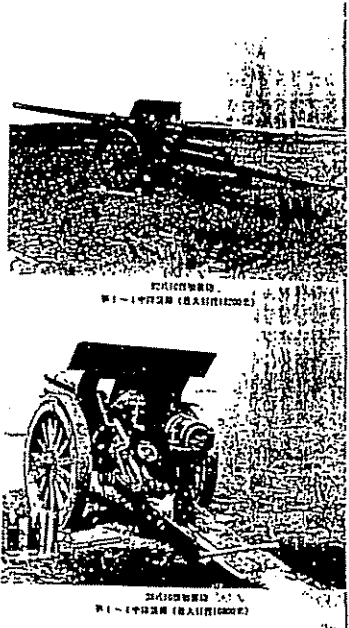
次に次元は異なるがソ連軍における女性の

進出が各方面で早いのに驚いた。例えば、女性が補助艦船や軍用船の乗組員となったり、さらに軍人の家族が数日後には柏原に進出して日ソ軍人のパーティーに出席する等々、種々考えさせられることが多かった。

以上のような経緯を経て私は、軍使としての任務を終了し、ソ連軍管理下の苦しい捕虜生活に入るのである。

### 師団長最後の人事

ある日師団長は私を呼び「軍使、御苦労であつた。何か行賞したいので、成瀬、板垣の両君を一階級昇進させ、君には（挺身遂任）の書を与えることとした。」と言われた。私は有難く書を載くと共に成瀬君にその旨を伝え、板垣君には副官から伝達してもらった。成瀬君は、それから直ち准尉の服装になって、その待遇を受けることになり、後日将校中隊の一員となって我々と捕虜生活を共にすることになった。



### 捕虜生活と復員

私はその後、師団長や参謀長の指示を受けて、残務整理、病院への戦友見舞い、ソ連との交渉等をして約四ヶ月を過ごし、十二月八日ソ連の輸送船により柏原を出航し大泊港（樺太）・ナオトカ港経由、十五日頃「浦塩」軍港に着き、小高い丘の上の収容所に入った。

我々の一行は、師団長以下准尉までの司令部部員であり、各自に一名ずつの兵（私には、秋田県出身の鈴木孫右衛門上等兵）が付き、所謂、将校中隊であった。その他の隊員は柏原在住諸部隊と共に、別の作業大隊を構成し別行動をとることとなった。

浦塩収容所で約十日間を過ごし、軍刀を没収されて丸腰で貨車に載せられ、十二月二十五日浦塩出発、極寒の中ハイカル湖畔を通り、